

詩篇142篇

ダビデのマスクール。彼が洞窟にいたときに。祈り

《詩人の苦しみ》

- 1 私は主に向かい、声をあげて叫びます。声をあげ、主にあわれみを請います。
- 2 私は御前に自分の嘆きを注ぎ出し、私の苦しみを御前に言い表します。
- 3 私の霊が私のうちで衰え果てたとき、あなたこそ、私の道を知っておられる方です。私が歩く、その道に、彼らは、私に、わなを仕掛けています。
- 4 私の右のほうに目を注いで、見てください。私を顧みる者もなく、私の逃げる所もなくなり、私のたましいに気を配る者もいません。

《詩人の相続地》

- 5 主よ。私はあなたに叫んで、言いました。「あなたは私の避け所、生ける者の地で、私の分の土地です。
- 6 私の叫びに耳を留めてください。私はひどく、おとしめられていますから。どうか、私を迫害する者から救い出してください。彼らは私よりも強いのです。
- 7 私のたましいを、牢獄から連れ出し、私があるあなたの御名に感謝するようにしてください。正しい者たちが私の回りに集まることでしょう。あなたが私に良くしてくださるからです。」

第五の「ダビデ詩篇」。本篇は、ダビデがサウル王に追われていたとき洞窟に逃げ込んだ際に歌われた詩と言われます。アドラムの洞窟か（Iサムエル22:1）、エン・ゲディの洞窟か（Iサムエル24:3）。洞窟の中は暗く、狭く、奥へ進むには松明で照らさなくてはならなかったことでしょう。しかし、エン・ゲディの洞窟では、息を潜めているところに何とサウル王が用を足しに入ってきたというのです。ここにまでやって来たか。「私を顧みる者もなく、私の逃げる所もなくなり、私のたましいに気を配る者もいません」（4節）という叫びは、もはや逃げ場を失った詩人の状況を生々しく描いています。

しかし、詩人は目に見えぬ方に向かって叫びました。実際に声を上げるわけにはいきません。心の中で叫び、それを何かに書き留めたのでしょうか。それがこの詩として残ったのでしょうか。「声をあげて叫びます。声をあげ」（1節）と繰り返しながら、どうにもならない心の叫びを訴えているようです。詩人が依り頼むところは人間ではありませんでした。彼自身も、誰がスパイであるか分からなくなっていたかもしれません。人を信じることすら難しくなっていたことでしょう。「私は御前に自分の嘆きを注ぎ出し、私の苦しみを御前に言い表します」（2節）。暗い洞窟の中で、不思議なほど身近に感じる神の臨在。手を伸ばせば触れるのではないかという感覚で、神が共におられることを認識していたのです。3節では「道」ということばが繰り返し出てきます。敵は詩人が逃げる方向に罠を仕掛け、待ち伏せする。しかし、その罠を鋭い嗅覚で嗅ぎ分け、こっちは危険だという声に従って逃げ続けていたのです。神が逃げ道を教えてくれていたのでしょうか。

5節では詩人にとっての神について「私の避け所、生ける者の地で、私の分の土地」と言われています。イスラエル十二部族にカナンの土地が分割されたとき、レビ部族には土地が与えられませんでした。代わりに、神は「私があなたの分であり、あなたの嗣業である」（民数18:20、申命10:9）と宣言し、レビ部族に専心神に仕えることを求めました。詩人はそれほどの思いをもって「神の祭司」として献身していたのです。しかし、そのような働き人を攻撃してやまない者が現実にはいました。

16節の内容は、詩篇のいくつかの箇所からことばを寄せ集めたものになっています（17:1、79:8、7:1、31:15、18:17）。詩人は幼い頃から聖書に親しみ、身に染み付くまでそれを読み、心に蓄えていました。それが彼の信仰の源泉であったのです。それらの御言葉によって、神がどういう方であるかを知っていました。その方と契約を結んでいたのです。その方に向かって自分は「ひどくおとしめられています」（6節）、敵は「私よりも強い」（6節）と苦しい現実を告白します。洞窟の中で身動き取れなくなっている状況は、さながら「牢獄」（7節）の中にいるようでした。

私たちの人生にも、詩人のような心境と重なるような出来事が降りかかることがあります。人に誤解され、悪い噂が立てられ、追いかけて回され、嫌がらせを受ける。しかし、この詩人の生き方から学ばれることがあります。彼は神に祈りながらも、自分の手では敵にやり返していないのです。いえ、やり返そうにも相手の力が強すぎて手も足も出なかったのかもしれませんが。それでも、彼は希望を失いませんでした。「正しい者たちが私の回りに集まることでしょう」（7節）と、必ず彼の潔白を理解する者が神から送られてくることを信じていました。「あなたが私に良くしてくださるからです」（7節）。この確信のことばをもって、本篇は締め括られます。

最後に、本篇はアッシジの聖フランチェスコが臨終の床で口ずさんだ詩としても知られています。彼は自分の死を迎えるため、灰と塵を体にかけてもらい、かすれる声で詩篇142篇を歌いました。45年という短い生涯を締めくくるにあたって、どうしてこの詩が最後に選ばれたのでしょうか。彼がその人生全体で味わった苦悩、そして死との戦いを総括するものだったのでしょうか。しかし、彼は主にある理解者たちに囲まれて息を引き取りました。「正しい者たちが私の回りに集まる」（7節）ということばがまさに自分の人生に実現していることを歌ったのかもしれませんが。